

ヨハネは、福音を壮大な言葉で語りはじめるのです。「はじめに言葉があった…」あきらかに、ユダヤの民に向かって語りはじめたのです。彼らに向かってイエスが神と共にあったと、…あたかも創世記を書き改めるかのような書き出しで、…書き始めるのですが、すぐに否定の言葉が

1・10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

なぜイエスを信じなかった、受け入れなかったのだろうか — それは後に続く物語により、イエスをメシアとして、信じるのか、受け入れるのか、メシアに求められる要件に対してイエスがその要件を満たしていないとひとびとが判断したからでした。メシアに求められる要件には、①ダビデ王の子孫であり、②イスラエルの主権を獲得し、③離散したユダヤ人を集め、④トラー（律法）を回復する、⑤平和をもたらします。

そういう時代にガリラヤのナザレに現れたイエスは、メシアであるかもしれないとひとびとから期待を寄せられました。先の五つの要件に照らし合わせると、①については、疑いが持たれているようですが、マタイによる福音書

では系図をもって、イエスはダビデの末裔であるといえます。②についてはローマ帝国の支配から、独立を勝ち取ることで、期待に応えてくれそうな様子です。③国が、独立すれば(②を実現すれば) 離散したユダヤの民は帰ってくるでしょう。⑤平和の実現もかなえてくれそうです。しかし最大の問題は④律法の回復です。これについて、イエスは完全に外れていました。まず、安息日の律法を公然と無視するのです。また罪人と呼ばれる人たちと公然とお付き合いをしますし、そういう人たちにあなたの罪は赦されると言って憚らないのです。

そして、今回イエスは「わたしと父は一つである」と公言したので、ひとびとはイエスがメシアであるどころか、ユダヤの法に異を唱える異端者として、激昂して「石打ち」にしろと叫ぶのです。何しろ、今回の事件は十戒の第一戒に触れるからです。自分を神とすることは、神を最大限に冒瀆するに余りある言葉です。

この訴えに対して、イエスは言葉ではなく、業、行いについて問い返されます。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中どの業のために、石で打ち殺そうとするのか」と。

ひとびとはよい業の故ではなく、冒瀆の故である、つまり十戒の第一戒にふれる言葉を発したのだというのです。「出20・3 あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。」という十戒のなかでも最も重要な戒めを侵したといつのです。

31ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、

また石を取り上げた。32すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中どの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としていたからだ。」

そこでイエスは詩編82・6「あなたたちは神々なのか／皆、いと高き方の子らなのか」を引き合いにしてひと「神の子」ともよばれることがあるではないかと抗弁するのです。他にも数少なくではあるけれどもタニエル書、知恵の書にも記されています。知恵2・18 正しいひとが神の子であるのなら、神は彼を助けて敵の手から救い出すはずだ。

34そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言つ。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。35神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。36それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言つのか。

イエスは、決して冒瀆にはならないのだ、とおっしゃるのです。さらにイエスが彼らに理解してほしいことは、決して言葉の問題ではなく、いったい何を行っているのかというところなのです。つまり「神とイエスはひとつである」ということは、ただ行いにおいてのみ明らかになるの

だ、そこに信頼の根拠があるのだ、とおっしゃるのです。

37もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。38しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」

このように言われると、彼らはもはや論議の域を超えていると判断したのか、言葉を返すことなくイエスを捕えようとするのです。

39そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。40イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行つて、そこに滞在された。41多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」42そこで、多くの人がイエスを信じた。

しかしイエスは神との関わりについて、(その認識を)「父とわたしはひとつである」という言葉によって戒律を犯したのだ、怒りのあまり、石打ちにしようとするひとびとは責め立てるのです。しかし、行いについては、まったく不問とし、顧みるごがないのです。

なぜそれほどまでに律法の言葉が大切なのかと、問わざるを得ません。そもそもフアリサイ派や律法学者がいかに

して起つたか、その経緯を知ればこのようなユダヤのひとびとの律法に対する頑なな態度も理解することができると思います。すなわちアッシリア、バビロニア、大国の侵略、それによる神殿の破壊、律法の禁止、異民族に支配される屈辱、度重なる歴史的な事件をよくよく考えてみますと、目に見えるもの、形あるもの、礼拝行為の場所さえもが、何度も破壊され、奪われたのです。

このような外的な侵略、破壊、制約を受けようとも、だれにも奪われることのない自由というのは、どこにありますか?—それは、ただ人間の内面、その良心がやどるところだけです。つまり思考や感性の宿るところです。

本質的におなじことが震災や災害後の教会がおこりました。地域社会が壊滅し、会堂、もちろんオルガンもピアノも失いました。教会は、青空や雨天の下テントを張って肉声で賛美をし、聖書を読み、献げ物をし、祈りました。外的に支えていたものがすべてなくなつた時にこそ、むしろ自分の存在を確かめる、自分と神との関わりを確かめることができる、そこにおいてこそ、言葉は真に力を持つのです。そこは内なる神殿であり聖域なのです。

ところが、ユダヤのひとびとに対して、イエスは「わたしと父はひとつである」と言われた言葉は、外からひとびとの内なる聖域に届き、聖なる信仰の核心となる第一の戒律を汚す言葉として受け止められてしまったのです。而してイエスは石で打ち殺すべき存在となつたのです。

もはやイエスの言葉は、閉ざされた彼らの心には届かな

いのです。だからイエスは、行いを信じなさいと語りかけるのです。イエスを信じる根拠は「行い」である、その「行い」だけを信仰するがよい、そうすれば、神とイエスがひとつであること、すなわち神がイエスのうちにおられ、イエスが神のうちにおられること、神とイエスがひとつであることを知るだろう、信じるだろうとおっしゃいます。

はたしてここでイエスが信じなさいと言われる「業」とは何を意味しているのでしょうか。ユダヤのひとびとにとっては神殿を失つても最後に残された内なる神殿、その業とは婚礼で水をぶどう酒に変えた業、安息日に病人を癒やした業、…これら一連の業は、終わりの時に完成するのです。19・30 イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた(完成した)」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。カナの婚礼にはじまつたイエスによる一連の業は十字架の死によって完成したのです。…ひとびとは、これが最後の皆である内なる神殿、だれにも侵されることのない聖域、至聖所をもつていた、律法の言葉が彼らと神をつなげる唯一のものだった、その閉じられた聖域の扉を開いて、内なる神殿そのものが意味なきものであると言わんばかりに、父とわたしは一つであるとおっしゃつた、イエスは彼らの内なる神殿を汚すどころか破壊しようとしたのかもしれない、

そのつまり彼らの信仰が崩壊しても、いやそのとき、自分が外的にもうちにおいてもすべてを失つた絶望の時にこそ、神はイエスがつけられた十字架、世が勝利したと歡喜する対局にある絶望において、そこから、すべては神の意志によって希望に向けて歩みをはじめるときであると凱旋の宣言がなされていることを知るのである。